

特別  
インタビュー

# 寺門一義

常陽銀行頭取  
めぶきフィナンシャルグループ社長に聞く



## 地方創生に向けた取組みと めぶきFGの統合基本戦略

それぞれの地元で圧倒的なシェアを誇る地銀同士の経営統合という注目を浴びる「めぶきフィナンシャルグループ」。傘下の常陽銀行（茨城県）と足利銀行（栃木県）を合わせた総資産は約15兆円3242億円（2016年3月末時点）となり、全国3位の地銀新グループとして昨年10月にスタートを切った。

人口減少等による地域経済の縮小懸念に日銀のマイナス金利政策等が重なり、地域金融機関の収益環境は厳しさを増している。こうした中、めぶきフィナンシャルグループは、経営統合によるシナジー効果も見込み、2022年3月期では連結当期純利益640億円程度を目標とする。

本インタビューでは、「協創力の発揮」を戦略の柱に掲げ、地方創生に尽力する常陽銀行の取組み、そして地域とともに成長することを目指し動き始めた地銀新グループの統合基本戦略などについて、寺門一義・常陽銀行取締役頭取・めぶきフィナンシャルグループ代表取締役社長に伺った。

# 「協創力の発揮」を戦略の柱とし 「4つの事業創造」に取り組み

## グループの創意を結集して地域とともに成長を目指す

—めぶきフィナンシャルグループの誕生から半年余りが経過しました。まずは、改めて新金融グループ発足に込めた思いなどについてお聞かせください。

**寺門** 常陽銀行・足利銀行の両行が主要営業地盤とする北関東地域は、首都圏に隣接する地理的アドバンテージに加え、北関東自動車道、圏央道、つくばエクスプレス、茨城空港、茨城港など交通インフラの整備が進展しており、これを背景に全国有数の企業立地地域として高いポテンシャルを持っています。

ただ、地域金融機関を取り巻く経営環境は、少子高齢化に伴う人

口減少の進行などで地域経済の縮小が懸念される中、資金余剰を背景とした金融機関同士の競合が激化している状況です。

その一方、グローバル化の進展やIT分野の技術革新は、産業・社会構造に変化を生み、FinTechなど新たな金融サービスの広がりをもたらします。

このような環境下、常陽銀行も足利銀行も地域のリーディングバンクという自負心を持って、これまで地方創生・地域活性化に積極的に取り組んできました。

めぶきフィナンシャルグループの発足は、いかなる経営環境の変化の中においても、「地域のリー

ディングバンクとして地域創生に貢献していきたい」「地域とともに持続的に成長したい」という両行の思い、「二つの夢」の実現に向けた成長戦略だとお考えください。

### 「協創力の発揮」により 地域とともに成長する

—めぶきフィナンシャルグループの地域創生への取組みは、常陽銀行が中期経営計画で掲げている「協創力の発揮」という基本戦略の延長線上にあることが見て取れます。そこで、常陽銀行が展開している協創力の発揮の取組みからご説明いただけますか。

**寺門** いま申し上げたように、地域金融機関を取り巻く社会・経済構造の変化が進む中、日銀のマイナス金利政策も影響し収益環境は一層厳しさを増している状況で、地域の資金需要の回復も力強さに欠けていることは否めません。

そうした中、預金・貸出・為替という伝統的な銀行業務を中心としたビジネスモデルは成熟しており、銀行は新たな成長に向けて総合金融サービス業へと進化（深化）していく必要があります。

そのためには、顧客目線に視点を変えることで、成熟化したビジネスを成長可能なビジネスモデルに転換することができると考えて